

日本語にて文を綴り誰レにも読める様なる文を綴る事を注意すへし 日本人の斯も漢字を用ゆるは大なる誤なるべし

十二月二十四日 新島双六 宛
『新島襄全集3 書簡編1』

大島 中正（女子大学表象文化学部教授）

この言葉は、1867年のクリスマススイブに、アーモスト大
学に在学中の新島が、昌平坂学問所に入塾していた弟・双六に
したためた書簡に見える。

異境にあつて母語で話す相手のいなかった新島は、漢籍から
遠のいたために忘れた漢語もあったが、祖国の家族に手紙を書
いた。英語では話す力を土台に文章の読み書きができることを
実感するとともに、そのスペリングとスペーシングおよびパン
クチュエーションのルールの学習は、英語が母語でない身にも
日本語の読み書きに比べて格段に容易であることを思い知った
ことであろう。

日本語をいかに表記するか。これは古くて新しい問題である。
たとえば、『古事記』を筆録した太安万侶は「已因訓述者詞不

逮心。全以音連者事趣更長。」（712年）と悩み、山本覚馬の
学友・西周は「哲学」「定義」といった新漢語のつくり手であ
ると同時に『明六雑誌』の第一号に「洋字ヲ以テ國語ヲ書スル
ノ論」（1874年）を発表する人でもあった。

もし、新島が現代の日本語の文章に接したら、何と言うだろ
うか。パソコンという文明の利器によつてこの「大なる誤り」
は見事に克服されたと言うであろうか。日本語がひとり日本語
母語話者だけの言語でなくなった現在、愛弟へのこのメッセー
ジは、なお生きて力あるように私には思えてならない。